

特集 ドイツの風に吹かれて

風景を活かした町づくりを目指して――。

街並み景観づくり運動を確実なものにするために、平成4年にスタートしたドイツ研修事業。今年度は9月24日から10月1日の8日間、6名の視察団がドイツ連邦共和国中部地域を訪問しました。世界でも特に積極的な景観づくりやバイオマスエネルギー利用を継続して展開しているドイツ連邦共和国。金山の景観施策や地域振興にも役立つヒントがそこにはありました。

※次ページから敬称略

DATA ————— ドイツ連邦共和国

首都	ベルリン
面積	357,121km ²
人口(2014年)	8108万人
GDP(2013年)	3兆6,359億ドル

通称ドイツ。ヨーロッパ中部に位置する連邦共和制国家。北はデンマーク、東はポーランド・チェコ、南はオーストリア・スイス、西はフランス・ルクセンブルク・ベルギー・オランダと国境を接する。ドイツの食文化と聞いてすぐに思い付くのはビール。年間の一人当たり消費量は世界一である。ちなみに、ドイツでは16歳からビールが飲める。



国旗



国章



10/1

金山到着。
お疲れ様でした！



9/30

リュートスハイムへ移動、市内視察。
フランクフルト発、空路成田へ。



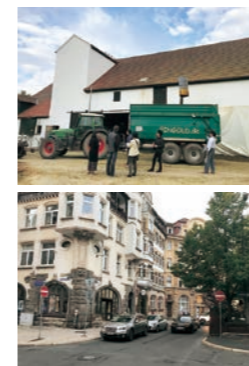
9/29

ハン・ミュンデン視察。
午後マールブルクへ移動、市内視察。



9/28

森の幼稚園視察。
ユーンデへ移動。ドイツで最初のバイオエネルギー村を訪問・視察。
夕方ハン・ミュンデンへ移動。



9/27

前日に引き続き、民宿農家関係者と意見交換及び施設視察。
その後移動し、アイゼナハ視察。



9/26

ハイデルベルク市内・ハイデルベルク城視察。
夕方にはグラーフエンベルクへ移動。農家民宿で夕食後、民宿オーナーと交流。

9/25

終日移動。
最初の視察先であるハイデルベルクには午後9時頃に到着。

9/24

金山出発。
ときどきわくわく！



研修スケジュール



伊東 光春

(金山町青年団体連絡協議会)

日本と同じ問題を抱える農村 グラッフェンベルク

ドイツに着き、日本では決して体験することが出来ない独特の雰囲気や匂い、街並みを目の当たりにし、ようやく異国の地に踏み入れたのだと実感しました。

中でもどこことなく金山に風景が似ているのがグラッフェンベルク。ホップを栽培している農家のお宅を訪問しました。ホップの最終収穫日ということもあり、家族、従業員全員でお祝いをしていたことが印象的でした。訪れたこの街でも農家の方々の後継者問題があり、日本と同じ問題を抱えているのだと感じました。

個人的に一番思い出に残っている街がマールブルクです。マールブルク城、そ

して、そこから見える街並み、木組の家々、細い道、聖エリザベス教会、市庁舎、旧市街地へ行くエレベーター。大学がある一方で、観光客も多く、賑わいを感じました。そして、最終日のリュースハイム。日本の方が経営しているワインのお店に足を運びました。試飲させていただきましたが、どれもこれも絶品。酒屋の血が騒ぎました。

研修に参加するにあたって一番心配していたことは食。でも今回はどれも美味しいものばかり！もちろん食べ物以外にも、街並み、歴史、音楽、風景、どれをとっても勉強になり、楽しく充実したものになりました。ドイツ最高！

街並み景観づくりと幼児教育、2つの視点から

私は今回のドイツ研修に参加させていただくにあたり、2つの視点を持って参加しました。

1つは、本研修の一番の目的である街並み景観づくりに関する視点です。第一印象としては、ドイツの街並みにある家々は、その町の自然に逆らうことなく調和し、美しさの中にやさしさを感じられました。日本では経済発展を優先させ、古いものを取り壊し、新しいものに目を向ける傾向にあると思いますが、ドイツの街並みには、そこに住む人々のこだわりと誇りが感じられました。その精神は、同じ施策に取り組む私たちも見習わなければならないと思いました。

正野 学

(金山町役場健康福祉課)



もう一つの視点は、これまでのドイツ研修には無かった幼児教育に関する視点です。今回訪問した森の幼稚園は、38名の子ども達が登園している比較的小さい市立幼稚園。自然の中にある木や蔭を使って子ども達自身が考えて好きなように遊んでいました。同行した先生に話を聞くと、ドイツでは幼少期から環境教育に力を入れており、「五感を使った自然体験」は子ども達には必要不可欠なものだと説明してくれました。遊んでいる子ども達の元気な顔を見ながら、当町の認定こども園めぐりでも積極的に取り組んでいただいている自然の中での体験教育の重要性を再認識しました。

アウトバーンでダイナミックな移動が可能に

ドイツの高速道路に、世界的に有名なアウトバーンがあります。アウトバーンでは、一般の車は基本的に無料なので、ゲートがないのはもちろんですが、合流のためのレーンが日本よりも長くなっており、スピードを緩めることなく走ることができるようになっています。アウトバーンも含め、現地の道路は全体的に、スピードの出しやすい構造になっていると感じました。特に信号を少なくし、止まることをできるだけ防ぐ工夫がされていました。都市間をバスで移動した際も、次の目的地まですぐに着いてしまうような不思議な感じがしました。

また、ドイツでは大型トラックが多く目

につきました。条約によりEU域内を比較的自由に行き来できることから、ドイツ以外の外国のものも含め、たいへん多くの台数が走っていました。

日本は山岳地帯も多く、高速道路建設には比較的平坦地が多いドイツよりも困難を伴いますが、ドイツの優れた道路事情や利用状況を見ると、日本においても高速道路の全国ネットワークを一刻も早く完成させるべきだと思いました。

当町でもいまだに高速道路が繋がっていませんが、つながることで、ドイツのようなダイナミックな人と物の移動が行われるようになると強く感じた研修でした。

水野 英治

(金山町役場環境整備課)



エネルギーの地産地消に取り組むユーンデを視察して一

地域の森林・林業を担う立場として、エネルギーの地産地消に取り組むユーンデの公式訪問は、非常に価値ある答えを教えてくださいました。世界で初めて地域のエネルギーを自分たちの地域のバイオマス(農林業の産物)で賄う取り組みを始めた先進的な町。そこで見た技術は、今後、日本でも導入が急がれているORC(オーガニックランキンサイクル)という農産物や畜産の残渣、木材で電力と熱を作るシステムを導入しており、順調に稼働しているとのことでした。

しかし、施設のマネージャーは「再生可能エネルギーの固定買取制度を活用したこの取り組みは20年間の事業。9年後には

発生する電力は半分以下の値段となり、施設の経営が成り立たなくなる恐れがある。実はまだ解決策は見いだせていない。」という大きな答えを教えてくださいました。

現在、日本においても、ドイツの制度を模した太陽光、風力、木質バイオマス等による発電が盛んに計画されています。しかし、まだまだ黎明期にあり、20年後の姿はほとんど描かれていないのが現状です。一次産業から産出される再生可能な資源が循環して使える状況にあるのかさえ誰も明確な答えを持たない中、直接ユーンデの取り組みを見聞きできたことは、金山林業のこれからを考える上で非常に貴重な経験となりました。

団長

狩谷 健一

(金山町森林組合)



「百聞は一見に如かず」数多くの貴重な体験を

成田空港から乗り換えを含めて、11時間半。長い空路の旅を経て、いよいよあこがれのドイツへ到着。最初の視察はライン川とネッカー川との合流点近くのハイデルベルク。13世紀プファルツ選帝侯の居城として建造された「ハイデルベルク城」は戦災の傷がそのまま残る美しい古城でした。褐色の建物は戦争での甚大な被害を受けた跡が今も残されている事に驚くばかり。城のテラスからは旧市街の見事な眺望、見渡す限り風情たっぷりでした。

印象に残っているのは、森の幼稚園の視察。朝7時半、気温は9℃、年長組9人の子ども達は長靴と防寒具を身に付け、先生と一緒に森へ出発。子ども達は森を歩きな



副団長

笹原 美也子

(金山町女性団体連絡協議会)

がら木や花の名前を覚えます。しばらく歩くと広場へ到着。広々とした森の中でとても生き生きと遊んでいました。広場には道具小屋があり2人の女の子が案内役。のこぎりを使って木を切ったり、ロープを使ってブランコしたり、様々な道具が用意されていました。刃物を使うことで注意深くなり、体を動かすことで風邪も引かなくなる。常に新しい遊びを考え、大自然の中で強くたくましく育っていく子ども達の姿に感激しました。

「百聞は一見に如かず」、ドイツの素晴らしい景観はもちろん、貴重な体験を数多くさせていただきました。今後のまちづくりを生かしていけたらと思います。

古いものを後世に残す取り組みはやっぱり素敵

特に思い出に残っているのは、高台にあるハイデルベルク城からの眺望です。一面にオレンジ色の屋根が並び、川にはアーチ型の美しい石橋。奥には森が広がり、これぞヨーロッパという気持ちの良い景色でした。この景色が残っているのも第二次世界大戦での被害が少なかった為とのこと。爆破された火薬塔は、とても迫力があり、壊された分厚い壁が寄りかかり、隙間から草が生える姿は、美しいと感じました。廃墟マニアという訳ではないのですが、荒廃したものにノスタルジーを感じ、現在や未来を想うということを体感しました。日本は地震が多いので、安全面を考えると、壊れてしまった古いものを、そのまま残すこと

は難しいのかな、でも工夫して再利用したり、修復して後世に残そうという取り組みは、日本も金山町も同じだなと感じました。やっぱり、古い物って素敵だと改めて思います。

私達がドイツで巡った、古城や旧市街、大聖堂など、どの場所でも、歴史を感じることができました。宗教や戦争、制度などが関係している事は、私には理解するのが難しかったのですが、昔から続いているものの上に、今の生活、文化、産業、教育があり、それを意識すれば、未来の事も考えざるを得ないと思いました。金山町の未来を考えたまちづくりを、ドイツ研修を通して改めて感じる事が出来ました。



天口 由香

(もがみ北部商工会金山支部)